



平家物語

特別
リ5
12960
F0



平政物規善才十目錄

新渡

八嶋後孟

戒之

于自友

高野彦

德野圭治

三日平氏

由亮女房

結之

海乃下

横節

維威出氣

維盛入水

藤戸付大常會沙法

小行氏藏書

平丸物焼書す

永永三途二月七日持津國一谷よりうき

治ひ一平氏の致とて十二日は都への致
平丸物焼書す
致よじもかゝるまゝらんくとも我方持よ
り。明るうき事をうきんす。むじりなり
うき目をみるんす。ひとかけさめひ燃
みあられきりわし。と大まき。うきま
ゆる。小松三位中納維威。此おまき。と
さうおが。うき。思ひ。ま。三位と云
と。郷一人。生捕。ま。その。ほ。か。り。と。字

ぬきその人をもぬけし物をして引つり
そしつらふ或女房の系へ申けりて位中將
没とやふ道の侍申てをさふらつす本三位
中一將没の侍ありたりと申されいさへを致
とも乃中よりきらめとていさへ心やとう
も思ひ終らると同十三日大吏判及仲頼六条
河原よむ向て平氏れ預けうけとる去疎を
東へ在洞院を小へ渡りて獄門の本よ然らる
アふらう一籠頼頼義頼朝と法皇との事り
あつむすしんとたけらうとらしを致ひ

て左衛門右衛門左衛門大目録河大助
忠親つよ伴合きく致又人の心つ中さ進け
致やびししりつお乃位よつごふ人れ致
大略頼朝とさ致くこと先物なり中をば
峯やえ帝戚里れ居とて久しき物最よ仕
まふ不頼頼義頼朝中一侍ありりよ侍許
容ありるられと申さ進たれはとささる海
しふらとさこのまふつらう其籠頼義頼朝
さうて妻羅しきふを保えのるを思へも祖
父為義のあつて末治のつらうへを棄するよ父

發物の敵ありと云ふ東成のくひ大路を渡り
まきくまをひてま自とに後何れいさみ
るその画法を過らんやや頻に宿中さきさ
れは法皇力及もせぬりすはぬる一渡さき
きりみる人幾子美といふ教をくらの事關
す一袖をつくね志つて一を怖恐れく奪
たほりるとまらまら小頭を且多さあくとを
あもれみくろくますとつふやな一中
りも大是るにひくまぬ人頭小松三位中
將維盛つれあ夫六代はあも附有らまける

斎藤五郎友六あまら皇のあがけのなまは
をやけしてみけまはし流致ともあまれみ
つななまきとも三位中將致の流致をえく給
つすまきとも詔皇のくまらにけくじよ
だんぬ海流をまけるまけまきしよその人目
まはらうろくまらつて大是るくまきりけ
子あ中まらつてあやや回たつしんその流
頭ともまきつてまられとも三位中將致
の流くひをくまらきあひはつす流見中の
流中もを備中當流れ流くひつるまきみ

させ給ひ作は違ふ外あるらんやうを浮首
うれ浮首と申されおあう違ふ人の上とも
なほくすとして引つりてそ体給ふ良きそ
新有九奇藤と名みるさうて申けるを
その一あはさうて違ふて人まをいつう
見さうて違ふと申替もみ下りてさう存ひ
違ふとさうに業内をさうてさう者なり
ゆゑとさうの言哉よ小松波代君を揚慶
也丹波のさうひたり三葉の山頭ひのさ
そのひ住りたり九郎勢理よ被られて新三

位中一将取同かぬ波丹後徳源殿を揚慶の
事砂らと浮首さうて違ふのい鳩へさ
ら給ひゆあなふさうて體させ給ひけ
ふやらんこれ中一御中も波りさうて
度一さうてさうて違ふをぬてさうて三位
中將殿の浮首へつりて同ひつれさうれ
を軍のさうて大事の浮首さうて違ふ
のい鳩へつりてさうて違ふを給
ひつすとも者なりさうてさうて違ふ
あるくと申へるさうてさうて違ふ

も頼る事も心づくる一思ひ終て初夕新
う皆ぬふの痛となりさるよさう風の煙日
をさふもや再よまぬふらんと肝をきく軍
とつふ肉を只今もわさこれぬひぬくはと
心をほくをまうてさやうの清りさつるを
と顔やたきつるんやさうあつひをさつる
つ建紙をつさうさうまやとまへ 吾妻忠姫
君もなと竹の清りさつるをさつるさつる
うやまひけりさうあつ建なれ三位中一将
も通ふ心なれし矢よあつ清りさつるも死体もた

ほらさうさう頼ぬら舞いさつるのさよあつる君
とさうもぞひぬく一落れ命の浮世にあつる
るさつるさつるをさつるさつる使紙一人さつる
てさつるさつるさつるの三れさつるさつるさつる
ふさつるさつるへれ清りさつるをさつるさつるさつる
て清りさつるの墨紙さつるあつるさつるさつるさつる
とも別さつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる
さつるさつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる
もなつるさつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる
奥はたあつるさつるさつるさつるさつるさつるさつるさつる

おとひとふ小川さみなり一箇浮世扱の経行
より巻けり津去を祿ふふともものう一ふれ
ふり山にふひふ部へ乃ほりあひ一ふ者其
をもつて一應見えも一見もて後自書をせん
ふを志し一とく流に流るる流同十回日生
捕中之位中一将直御つ部へ入て大路を渡
さる小い藁乃車此おほれ篇をちを左ふれ
物見をひくを去肥次永賣平本蘭地並悉ふ
小具足つるし一と流無世路のひをし一と車入
おほれ流も流志なる京中此上下一と流みく

あれいも折し一とくもま一とくも流の中
よけ人一人く一とくもふことよ入為流ふ
も二位流ももむほくの流子もてましく志
つと一門の人とも折りさく一とく一と流因
るふくさぬふ一とくも流も流も流も流を
をててりてなり一とくも流一とく一と流人そ
奈良を流りて伽藍代尉なりとつひあつと
と流を京へ河急まをりて一とくも流も流
て故中流門取中一とくも流も流も流も流
の流雲もす人そをりて一とくも流一と流

依清下りり清使は飛人左束門控依長八
条げり河つうひりひる赤衣は叙筋をう
帯志ふらりる三位中将を緋村澄也
物烏帽子引立ておし海に日來をたにと
おくれきりし是長をと日を冥途をて
とものお冥友よあへるむらうきりけり
下さききりるい嶋へかつうとくそ一門の
方へしひ送れて三種神忌を都へし
お建志つうい嶋へつるさうしとの清
氣安なり三位中将中さきけりるをさうも我

おのさき三種神忌頭重勘一人は替あうを
びとを肉舟に下一門の老ともうらうも
うらも一姫てうらを母儀に二品なと
やさもや作りんすうんさうへとも君お
うら院意をアアをうをて恐も信人
速よ中一送しうを見ゆつわとうりさき
子院意の清使をまを左衛門重國清坪台次
花おとそ字し一太君波平大細をうし院
意の額をうさう子二位取アし清又あうく
と書てふりるをらる松のえさゆるさき

ましんくの并へし調ふくつやほてらる水
本大ゆ之依敷へもあやしくもて中へ進せり
橋のそよても人を我ふなくさみぢや人よ
懸し物を引りて乃ちつふりさう
にすらん契りやとちきぬとちやきし後
のそよを生き進せりやう一五一進うと初
終へて流ることほて流へとも進國もつた
よあかして海をくさへて立よたりあくよ
三位甲将乃侍る本之志馬先知時といふ者
ありこれ表と肥次郎表平のそよは初てき

を道来三位甲将没より一はつりし
つと甲者よてゆの兩國へ流下乃河も流
流はつりしゆのそよは兼糸れとの
まては河原部ふやうまつてゆり夫をとる
かまてはそねも軍台我れ流流を侍るあや
をゆりす船夕をたぐ河原をいつりてゆい
今ふ大路まてみまのそよをてくしわまらよ
系橋うおもひふりしそよなふのそよ
ゆが流ゆりさ進をうりしをほて表
まのながさる流をもやてなくさあふりしそよ

やや存ゆるまゝに是れ未だうおほくしめしき
らう勝の力をうしりてのれく曲て汚穢を
ううやうゆるんとりひたれい去肥液取捨を
ものまて越る汚一方の汚事へ何れを致し
うけへまゝにゆるりとしてあゝの力を乞取
てそ入てけりた馬先斜なうもろあひ急
集て汚ありま備をみまらま穢小思ひ入給
るるとれをしして汚染をうこう志不違返
ておししけふをみまらするに急何なきこ
もをいふうう中ゆるも後舟ゆめみるんら

してとりの事をもまじらすさうる今の物
流とまじりまひくうらあとも海とまじり
ひ一人をまじりぬるまじりやまじりう承り
うへ西国へ下りてあも云並まじりなり
しうや世くれ契りまじりあつるまじり成ま
けるうと思ふらんう死しうれ文をや
らうやまじりしうをうお尋ておらんやまじり
あ人も急何やまじり程れ汚中ゆめ中將斜
なうす娘ひやうてういてそたふてけり知
時あれを給うてお出ししうまじりう承

夜々見送ふ小西園まで生捕まきつれども
志を操命目的目をもとくつる方々の儀
細々と書て奥より一首のうらそあつらふ
おみへ川うらをるをたりのを者なりとも

つたへよひのあふ漱とこりぬ

女房のあまをよとらよ引入てせうく
こを盡すひきいつてそよぬふひく
て時刻をよとらうけきこぬ何とふれ
禮をゆがけのあう作法を奉た下もつて
集りゆりんと申されも女房なくくはせ

本 書寫へるにころころうらふきくしては二

自を送たころころの中をよかしくとういて

きこゆへよひ建もつた名をふりすとも

うこのみとつとこころなりまし

知時ふれを給いつてのぬりあたりはれい
当護のあまとも又りのなり。清もこころ
ゆらあみ下つてせじと申されをんきてたり
ころろ志うはまうとてなち中將をん送る
いこ思ひやあいられなんとのそのことな
も盡す辱くまてお暇取賣申なりて

意ひたるをさすしも世やと吾の情婦のうき
心おりのけりしうありのうきやれ
さすをさすはよひさう一た芳思慕となまあや
わり我を一人の子なきはしほさよ思をく
ことなりと来葉つら女房よと一考葉面
して後生乃らやをもひひのちやと思ふ
をりのふりおんややまへしと肥田赤な
あきある者もて祿よ女房などの清めさ
何のともしう久へまとうくともゆり
さる中一将斜なす娘ひ人小車ついで遣

女房とる物こととるあへまいうふまてを
つりける撮舟車をらさし世のちと甲ら
これと中將ち後の方士とものみすつを
よちとさせぬふらんとて車のそられ
頭おがけふ自ふをとりとを教よりか
をいあてし志しとをせのうらことをさ
しとたくなくとも外のこころかさるる
中お海くくさへて意ひけらるる困へ下
り一町も甲還ことしつすま後又りのた
便りもふをもつらきと清書信をも取

ふぼしうゆしむてそお夕れ軍は隙なく志
てまのうつこひさしと又のやうしようをのみ
ゆき二度のひ見をうつまのうてゆきりとし
かなさぬふうのひの心れ中推量られて意
なり小敷もやうく文彩をあのほとを大
路に振舞えそゆら舞と中きれをとうく
とそせしならる中特約れ袖をひのう
あふこととを落のつれちもそろとをう
ふよりひらうとわかまらなるらん
女房をみこもてまへて

のさつととて左のうつるましおれ方の
三つんらうとこれにまきわへまらぬ
さく女房や由志へのうとまらぬふそのら
あ当譜の成土ともゆるさうのわ力及つす
阿たう清文つるそからひけりあめ女房と
中や民部つ入る親範の娘みの新うつ
を心持はよおしとりさまを中將苗部へ渡
さまはさうれゆひゆと中をしとそやく
をうる濃墨深よやけまつてその後を兼
をとふらひゆふう意なるさまはけと
院意

乃清使来三左束口直因清坪台次可也八嶋
るまのつと院意とともいひてつくとまら大后殿
己下八郎お書あふらまのひひてあめぬん
とんてまひつとまける

一人至祈お水關九禁奉祀別三種神意理南
海口海陸教をむの死歎亡國之基也押好重
漸心来大与悔失之逆臣也須但輕の朝信中
請自降可被乃死能獨別親族已成生捕殺島
志意心遠浮寸里南海帰為失友心之毎九主
中一遂平純則三種神意於在返入部好つ丁

被竟宵也者院意也此乃執在如件秀永三臣
二月四日大徳大丈成忠兼兼上お平大助之
没也もううのまら大后殿より平大助之
乃許へ院意人願を中と建まら二位教中将
此又也あまきくみ清ふ小今一度重御を今生
まて清福んちんとたほらうとく三種神意
乃清事とらさ揚子中さ勢由て部へう了
入させぬ人作もてを此世まで清目小然
子了しとも存山のつすともそつれらる二位
没中持代文をうがよ押南て人々此おし

あつとを専ら舞と思ふゆへにさうさうの如く
あふまへをあつへたき申将一あつて生捕
子きられぬとさう志乃らさう胸きさて
湯水も喉へ入られず申將あのをさよなき思
とさうし我も同しさう思ふなり
二さうい物をねもさうをねえよたうさう
か人ややしてあつれあをい給つて越す
さうつあえさう人さみさう目さうな
まけら新申一あつて感つて呉思よ申さ
けらさ三種祿思をさうやこへさうりれなり

さうともあつたをさうし終つてさ
かへたたくそのやうな様なうさうさ
さうもやゆらんと申さうさうい後志
さうさうしとさう大信殿清清文乃やう
あ二位級を渡ふさうして舞のたてとさ
さねとも志をさうへよなくく清也事出
あらあ大細き依教もたみさうしやい
さうしてさうい事をもさうまらさ
のつづくさういさう全國之祿よあつて
あつてたみさうさうさうさうさう

孫自武代々在々有与約取至運純身故之父
古改大臣保元平治每度逆乱何重勅令輕松
命乞備為君全不為力枕中好執約去平治之
道十二月依父左馬頭勢約謀叛己の被誅罰
中頻降被降下故入道大お國意地節不被中
意也然忘為供思不存芳意忽以振蕪力振成
神記記心息意甲多餘子招神弊夫昇岳約約
後換滅忠事支日月为一禍不暗之明王の
一人不相之流以一息不推之善以小服英茂
之切且南苑教代有乙且之父教考之節不思

貪忘忠奪可之空國法幸事時后亦兼後立二
還舊郡宮曹督死為不然の到冠累高聲乙立
震且地計南人王八十一代法守我約神代矣
兼道立地吳國室平互以是亦趣の純極合演
養父宗感於首謀言秀永三自二月廿八日從
一位前内大臣宗感清又とらうのく連され
甲了左大臣を中一さ連さるけりけくそんく
内くりふでうおももれけりま結又とくく子
外兼一てはれいさねとらう我約の重誓三條
神意を重衡一人子誓ハのせじとやふらも

さけしとさう思ひけりうとそやあをまきけ
親三位中一将も肉府己下一門の老とも
つふ魚う思りんすもつや故梅きりもま
ともつひそかなさうけ又すそ母所来しや
三位中将主源つ笑来へ下らるうしと字を
しりやまやあの名跡もと文行うやたも
くれらん去肥次源美平跡つてお苑の志
たよやりのよとまへやあめうを九条源
曹司へ甲と後源承へそつらんきりまら
きれも法皇頼朝よんをてしそともつうと

ちつらしめ只今さつりてゆるむ人ま
作れあまの由と申汲汲に申すあを
来契つる至よ後生れとまを甲淡をしや
思ふさつりつとまへや去肥次源ひり
と誰と中山やら舞忌若の法然坊也つふ人
なわさつてさつるしう作夫しとさうと
とそゆうなる三位中将斜なるすよら
あひやつてひりまをさやうを法に
さまらるあさつても今度直衛の生あつと
つ建てゆらる事へ二夜上人の法皇系も

の流つゝまゝてはたりまぬうほ生つゝはり
うへまかの方よりしりてはまはまきま
政勢もがたきま驚愕の心はまあつゝて
南東の殊流を教をいしんや運けふ世そこ
まて部をせいのらそあうこふたつゝひ家
よあつゝうひ人をほろかりし力助つゝじと
ねりし心結まゝ人まらて善心をうつて
はこらひ然中南部若上の事を王命といひ
我命といひままほつゝるよにほふ流はつ
れつゝうしつゝつゝと向けてうへま不慮よ

伽藍に憾そよ及ひしひゆりあやを力及し
さうは身なり呵の大將軍よてしりて圓美一
人ふるまとうや中ひなれを直樹一人う飛
乗よようなわひゆりめとむほくひのつを
つまはらら流あらひゆりともほうれ指ひ
とれまう思ひまゝけりるんとを教をも
そつて戒をも持ちなとてしりて小佛を流り
まゝうけんとまむら方よ流なつてゆりし
心よあつゝるをもほそゆりすまふあまをも
まゝうの力れ流まふのなつゝん流を流り

此一乘をを扶けりぬアしとも是をぬあむ
くうの朽しう久つく一生代化行を
あじとる小乗乗を須弥よりもまを善根を
微塵のりもくくた人なりくして命むさく
う終りひかき火空湯の苦果得て疑ひなく
歌しくや上人慈悲をわあしわしきみをま
ぬきのくる悪人の助るまわへまは法をく
志のし人ともくまきたれしその時上人海
おしをひうきふして志ししを世のうりぬ
事も意しと辱くまそ上人喜ひけり誠まき

のく人かたうけぬしになくまき
るりまきまきじことくくしりてえ
わりゆるまき織とていやく浄土を
まき悪心をまてく善心をおあし
むこと三石の祀佛もまきわて
らんうれよつゑか離乃きさ海く
やをまき法流れれ積まき梅る念佛
てまきまきくまきと志を九品
六字よけくまきわりのなる
唱ふるよ便わり飛流れはとく早下志ぬ

るつらひ十思又迷廻いすれも生生をとく
切儘もくたけまじりて望城たつへつす
一念十念のふくろをいひこきし来迎を爲す
ふそふふと釋してもつりつる名号をてり
にまじり両方よつこ念く極名常懺悔と立
てねんくくに弥陀をとりよれもさんけと
ふかりとくをへける利銀而是弥陀を以
たのりし魔縁ちりけつと一なり極念花宮
際と念すれを宿みふのそつりと思へる
浄土のま極名略を存し大略を道を行

心と他姓生の得るを信んるを無よあり
るたはくは教をゆつる信しため恒府外
時不流縁をまじりす三業日滅滅よをひて
心念の極法わすれ終つす平念を起して
此等試界と出てもあふ返ふは生生志た下
もんこと何のうごひのあつてもや教化
志ぬ人も三位中将おれあなつるあひ
け次も戒多もつてもやと存ゆを出氣をばり
てる時ひゆまやちりまじりつる上
人お最きぬ人もういを多もつこと終つ

のなりひなりとて教ふらうそて王族のてう
子中をてして十戒法さつまゝるる三位中持
法若くは海をたすのつくは頭うけたもちぬふ
上人も若物めしきよおがもてうさうらと
あくらしてなくくういをもとるのれらる
汚布絶と切りてくそ日法おしてあうりて
けう約のりてに教けをのれらうとまゝ汚泥
を念四してのくよまて上人よなりやとま
たのぞお揃ててまをい人ようひ山つて常
よ汚目れうくら衆雨よをうまうてうまの

しものものと汚境をん塵とくよを汚念佛うへ
志又法界よを理をも一書汚血向作とくは
新へうゆや中ままにれし上人やううの也
事よををらひ給りすあまをまて懐よつれ
墨漆の袖を教り押南匠く思若つらうり色
られらる件の際を親又入まお國の宗師の
汚門へ砂金頭おがもままうせのひたて
つち也指とおほくくそて日本お田平大お國
の許へもて送られたりらるうのやるを
松陰とそ中けのさうぼくよ本三位中將を

漸疎をもし猶念ふ共東依乾船志をいふる
さきさきれもささるを下さるるをいふとて去肥次
帝夷平のちふるに九飛浮曹自此有取へり
しきる同三月十日極原平之京内子具を
られて笑来へり下られけき西國をい
りふもなるふりて人乃のいふとてい
て都への不里のふたに口惜三たに
笑来る都の建らんの中推登られて
曰え河原小なりぬ建てをさびし
中乃王子輝丸れ笑の尚もあくるをささる

琵琶越経のひりしは情雅之位といはれり人
れ吹目もあつぬ日もあるもあつぬ
我もこと勢の同歩越経ひ立守てうのさ曲
をつつんきんまをれ本のいへと
辱られてあつれなりお坂山うら朝て後田
の唐橋釣もやくろともななり雲雀め
けり野路れ墨志紫のうら浪雲りあて霞に
とも玖鏡山は島れうの祿をわうして伊吹
れたきもちうけえぬ心せとじしなき
連ともつて中へやさし不破の雲

屋乃指ひさしつふ鳴海に垣于沼なみさよ
神を志すまはしく故を恋乃なふし一れ夜衣
まはしくなれりしとならぬ先せん三河國ハ橋
まをかりぬまはさるもてま相をこめをまは
漢名乃くしとまはるまはつし松の橋も國さ
こして入はまはるまは波の音あつてま橋を相
うさよいをはくまはるまは池田の音よまは
清ひぬはるの長老慈世の娘侍従のまはま
そのまを看まはるまはるまは侍従三位中將をみ
まはる日本をけしふまはる思ひまはるまはるし

人れ々ふや町ら処へしをまはるまはるのう
まはるまはるし一首のまをまはる

たひのうらまはるまはる小屋のつふまはる
まはるまはるしつうまはるまはるしつうまはる

かへるまはる返奉る
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

中將やまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

まゆらとやわれうい鳩の太居波れい
南園のちうてわさき給ひ一何めさ進ま
まて清き巻ゆ一う巻母をこ進す一とく
ふみ能頭ししうせぬりうさりせれを法
孫生乃けし絶なわけり

いふおちんまやらの妻も朽け進せ
なれししわつまのまわちちらん
と休りてふをぬくまうりうさり
る一乃ふ人まうく一とそ中けり都証出
日教あれし孫生ま進まうもさ進なん

まき山のむを跡むれ雪のむをえして浦に鳩
鳴かすままらまう一鳴く初来れ事をも
けけぬふうまをさ進まのなる高葉
れうしてあそと進ひてたけふまぬ酒や
かみるなり清子れ一人もたせぬ事を母の
二位ぬもかけさか方大油を依波もなきを
まことみしてらるけり佛神よいけり中
さ進まれともま進なり一鳴くあうそたりの
まう子ぬまをまう一鳴くあうそたりの
うらうら舞とまひたるうらまの事

が建佐敷の中一山よのくこめふろをこ又六
ゆへーやもおが尋ねしむくあしむのりす
うひて袂そつこをぬきまふさうけい山道
のほこのみらんほろくもうらあして自新
をさしてゆきしおよきさうけい書しりまふ
わりと人も甲斐れ白根といふ三位中将に
けり海をくくへはく

わーくぬいりかなれともまふまへよ
清見の笑うりおとそ富士のすう野よなり

ぬきしおよをき山塚とくして松崎園意ふ
らうと南よを蒸海まんくして岸うり波
をさうくくうと意きしやまぬアしあひき
すまわりきつとと明神のうとひくくのひ
らん豆柄の山うり新てあゆふ本乃森鞠子
川小礒大礒れ浦くやたまと礒上の原清興
の崎も打とまてしうのぬたひとを思ふ
とも日教やうくくうとさなれも鎌倉もくう
つうとあふさうの禮よ兵衛佐敷之位中將波小
裏面きそ押君の清懐をやと典なり又の死

新書じと思ひぬらうへを平氣河之さん
こと業の由よりひしう其まうさうきそ
かやうは目よりんアしとをりあても
存きすゆえは定てまひ嶋の大長政の見系
月を死入ぬし存以探南都をたさせのひあ
頭清事へ故右返入さ政の作てゆりり
又阿小衣々の清もつらひりもつての外箱
葉よりそなりゆりんすうつや中さ達され
し三位中将のまひり多や足南都卷上乃
ことお故入るれ成給もをわするは物の子

記うとあうとたう流乃魚形をしめん
うたのまうり白けてゆいけしよ不慮よ
伽藍代滅そよ及し作ゆりことわ力をよこ
さうは才なり若る源平左太ふあううひて
物死れ清明くあまうりくわをたわ保成
の運をたうし事をやみか人存知乃ひひや
あやあうらう中つまよあうと南苑を保
元平治うりよ来たこ乃物款をたうけ勅
貴方子あまうり帝祖を改太居ふりこ一旗
人孫を六十餘人女名達れあめりてあたの

一業を計なりうれはけふりても事王
の清敵討つるものせ七代まで約思う發す
世甲のやまのつめはる傳車りてそひひけ
ふうれゆへを故入さお國君の清たれお既
よ命をうへおんこととるごとく度とよ及小
さきともそ者一代れ幸うて子孫うやう丹
なるつふやを流やうんいふ世そこまて部
を野一りらお穀を山野はあらへを海
の波子流さそことう存き一うのつとあう因
つ建てあまきまへうこおへ一ややうけくを

も存きすゆきたれおをみの希業ううは行
ううへ他殿湯や衣巻よ目もれ文王を姜里
よ因りるとりふ又りり上おかをわくのふ
と一いつらんや未代ふをりくをやう勢を取
方れなりひ敵れ自らうのくはて命流う
かしてこし金を死うてもらなうすたう芳
世もそとくく首をとりらるるうとてそ
乃り吾酒をも並りす板原是証ぬてわつし
建大將軍ややて海をたりのと待たもみお神
をそゆう一きる共業依返も平亂を別して

新船の松の町へこきとばもひをらうやをきゆ
免ゆめいしすたぐ希王れ作らうおゆうい
つめてそいこまけらあの人を南部をほろ
りーらう伽藍のてこなれと大前まめて
音もやあら舞すこんとて伊豆國の巨人猶
聖分家茂らう新あらうその神冥途まて遊
笑を衆れ酒人を七日くま十五のちへ渡
さるらんもくくややなほくてわとまなり
か行くかも信ある忠まてりこうまひーう
もあつてまららんやうくまはつてりまあ

き湯ぬ志つゝひなとて湯湯ひのきをさ
世ほとのきまののあをりふきりのまはれ
力をさまのてうーあらんすらまうと志
ひく徳ゆふ起るあをなくしてまの松ササ
なり女房の文ーろうまよまきて後のおく
里まことたうけくまら目結れおくむ
ま深けれ湯巻してゆ波の戸押あきてまり
たり庭くまそ十空みりまの女童乃後をあ
あれたまなりたりのこけくあのおくひ
まらんさうまうへて持て来らう中ぬい

女房うい志やあましくはゆぢぢりひのこあ
しをなとしあつとほひぬさそ好女しう
軀やまてけいんしうけるの男なとを
事なうこそおほくめす女を中こころし
るましとてふらふられてまぶらふるま
な事よてもたがしめいせんするは事な
を承て中をとう共儀依波を伴さゆ
ひはま中將とやうける男となつてなふる
あつたしうきんしうしうてをが敵そ
とこしとまひきんしうしうてをが敵そ

共儀依波うきんしうしうてをが敵そ
なうしうしうしうしうしうてをが敵そ
ねし叶ふましとてをきんしうてをが敵そ
後乃あましとてをきんしうてをが敵そ
房を後なりけるゆふををなにとりふ
やらんとしうしうしうしうてをが敵そ
のしめめ名をこすあましとてをきんしう
てをが敵そしうしうしうしうてをが敵そ
箇を依波しうしうしうしうてをが敵そ
その夕アあるすしうしうしうしうてをが敵そ

たつとや一伴の女房琵琶もさきくまらうと
稻野かゝ子郎亦十餘人引をしく中將汲れ
西あちううゆたりこのれゆ酒すくめを分
十も不酌を取中將をさうけてゆく真な
けよておしけれも稻野かやけを止まこ
志あさきてもやいらん宗氏やとや伊豆國
れ老もや酒愈てを捨るらんとも心の及
らんやとや乙体りいさく悔念まで我恨む
なとさう音楽依殿も原は傳達うれは
てもわれりや酒すくめ給くとひひけさし

十も不酌をさうとさき酒終のまきうら
まきとて横婦子祢たじとつふ酒舞を一あさ
うさうらうらう三位中將じらう志いをさん
人さしお野之神乃一日お三夜舞てもら
とさき捨るやむしーさきさきともま潮を
今生よてま捨られまらる方がまきも助畜志
てもなふらさん但飛渡りあさぬへまこと
なまを捨ふしとまへますもあやりて十
魚とりふともたけ捨すとりふらう志い酒
して音楽歌りん人を皆祢陀のふ号新唱小

了しとつよとやうを言ふせうこひまきう
らうとたれしうれ時之位中将を明かす
子子自前給しつて猶聖かゝる所と宗茂の
びつ子琴をうそ浮とあしるる三位中将は樂
とふ書面もそ不書ふといふともいふと漸
うたつよを極生ふとさう親と人たれや
て姓生れ急をひうんとさしあれ琵琶を
然子をねちて旨蒙り急とさうひつ連たる
こ漸もあうらひむれさむまうよわれ
つすや名書とをさうれ語なるんれをけ
ようれ何事ともいふ一辨とまをす

おろとねて一樹に陰よややまのひ同し
を法もみかき足むの藝りといふ白拍子
頭まことふれもさうかう人さうと書
三位中将を燈圍教の虞茂海といふ郎孫を
そまうれけりたと人をあめらうとさ
をる唐よ信高祖と整項羽と位張わさう
合我すること七十二方我ひと項羽り
ぬさ書ともさうを項羽をきてさひ
也つ馬乃一日よ子星とさうよ系て虞茂

也云吾やとて小遊所へびとせしは馬つ
思ひらん是をとく人てとらるのせりう
うたみこを流てまの城勢すく小とられた
了敵のをろふをことの教なるをたぐまの
吾よおれん事をれもすうかけこの
なりみあるりまるとも一かううなり
つらむほうくて虞氏海をたのす更初ま
もを軍兵四面よとさ強はくるまの心を搦
あふの節よ油けつを三位中廻と思出られ
けりうやいやをさううそさこころを禮に

我も明け進ち我とともみふ能やて死かす
もあも入りおきりうれお無儀依教を持佛
雲よはぬ強積ておらけりう取平す自前系
ら上依返打暖ぬひてさてと持ふる中一人
をいおもしうも志さかものり助とれ
ま人を奇院次友親勢はあ小物がつくゆも
おる方に事うくゆひけりやらん依返意ひ
ける平亂れんを甲書う勢の外や又後す
あるまうとらう日ころを思ひしるま三
位中將の器魁のちら言詔誅れやう終費左

史記のよゆふ子屋さうま人にて清澄たり
親弟中一歩を誰も扱了成度ゆーりとも
おとすやーのひつこもるあやのりて兼ら
作世後やつゆよまきく山をー平家を代と
代方人中人をまていなり是迄おれんとを
むよ喩ゆーまをけえ位中將攻をしがたん
乃花小喩へてゆひーらとそ中さ進けり三
位中將お器巴れいらをこらうとこれゆを
さひ若東依没のらまをもわりゆへまあや
うさひらるすもあや中一い酒思ひの

種とやなりふきんうね中將苗部へり
さ進てふくまのひゆいささーらこやう
換せりゆあふすさうあよや所進果て信濃
国善光寺ににたひまきうて好後世美攪
をとさうひり力も姓生の素懐誠遂々
とそ中さーしさる種よ小松三位中將維盛
つを方うをい鶴よありあうんを部へ
これりあつよとくめをさ終ひーんこれ
おり新形を方小ひーとちらそひく思あ
際もなき進しあるよひかき我力おと

秀永三年三月十五日乃晴忍ひけくハ嶋の
皷をこまきこま出でて三島来る桑名童丸と
つゝとつゝと船小んゆれもとて武里と云
舎人きお三人つゝとつゝと何波困結城浦よ
里舟小たり鳴戸乃興をふききとて紀伊路
を赴きつひたりわ言吹上夜通嶋の神と
まゆ人新玉津嶋の神日あ國越入山前
過て紀伊の藩よとつゝ若狭人あまきとつゝ山川
たひふさやふへの不里あひとまものを
もと一彦みも一足くもやととあつれけき

ともが之位中將生捕よきとまき大路を渡
き連系種念死をささしぬふたもは朽
まにはあさ人因つきて父のうも母よ血を
あやさんこしもむとてちとひあく
あすくめとこむよあくろ越ううひて
聖山小糸りりふ高聖よ遠来あや今聖
里三系れ斎藤左邊門大吏茂頼の子よ母藤
跡口町頼とそりとそ小松殿の侍なり十三
のと一本系へ系とつゝ建礼門はの難目
に横筋とりふ女あり跡口是にあますふい

申す侍交てをよめしむ老入奪ふもなりて
お仕なとをもいやまうせさう勢じとすれし
ふいなえものをぞひうのそなとあれのち
すーいさ免れを誇り申けるをある王母と
いけし人じしそまていつたをたし東宮親
也ささこし君と名をれまきして目まをみ
そ老か不きのをみの中を只石火れ光よこと
なうもたしひ人長命といひ七十八十をい
過すこれ中し小男の威なり事終る女名
自なり羞幻のを申よみふをさ美を行阿も

みくなふらちん思ししまねをいんしとてま
し又れ會てうむくた似らよと道善氣識也
志ししうをを頭してひまのるお入なんと
て十九の道ととてまきつて暖暖れ生院
みおこるひたましてそわらうけの撰重ま
ふしを夢て我をううとそく免格をさへうを
らんししううううううたしひををしそ
ひくともなとつやめくとしさうをさうか
人ううひけうくとも為てううみんと思ひ
はく我書本よ部誦いてく暖暖のちうあ

きつぎけりつを三月十日あまるまれ事なれ
と梅津の里の雲風よりその白ひもなつら
し見大井川の月影も霞よふやてあがろふ
つ一かこなぬ霧さもたきゆへとらうえ
けの姓生院とやまこつれともさこのふひ
津連れ坊ともとくさきもあく母やそらひ
りこよたすききぬるそびさんなら
何ゆゑししとら僧坊も念誦のあつ志きり
多きとら入道の祥とさくならしてさ海のか
つとしておとすもんをももいふはつを

ひのたつにまゝをうそまてあつらへ
とくしとら女よいらをけきと海口入き胸
おとくしとら濱橋に隣子れほらとのそひて
みきしとらうそら袖をたみこよ志をきけ
まこととらふたつねのひとらありさ海口のね
ふさ心者もん弱うなりぬえし人をおつと
金とくさきとらま事なりあつとら色もや
ゆらんとそけのよあてそをけしきる横筋
情なう根のしもきとも力及びす海とさ
つとらりたりも極端に入る回者入後す

澄けよ是もよに 頼りて念佛の縁尋や山も
ぬやまのうておれ 女子世極老を又して
ふをたとひ一度うむけゆくとも又と
たふふあやめくもあくるももこらさひ
るしと極中してとて 澄誠をい出てま誓へ
ほり清淨心候まうぬらとまらふと
換せり包めりふり まこころのま 澄け入る
一首のうらまをくつげり
うまのうらまをくつげり
まことのまらふり くれをこころに

撰節の巻末

そ致せよもなほのうらま せんあつさ
ひきやくしん ぶあくるなう
その後撰巻を奈良のは ぬきよあつさ
そ思ひれはりまやほぬまらうのなかなわ
すけり 澄け入るまのうらま せんあつさ
つとく ぬらうのうらま せんあつさ
それをも又も不孝をゆき せんあつさ
もみふ用てま誓へるま せんあつさ
るまふあつさ せんあつさ 時を

布衣よ立烏帽子衣袴をういほくろひ後
なすも物やのなりしをのこなりか家の後
をさふけしゆてみぬふよいゆる母をとな
さう子老僧婆よやさうみく流雲深
同しあさ吾人の娘よしとうが里さうしきよ
思ひ入るるさん老浦山しうや志もれらん
吾人七賢達人四ううのすをきん高山竹林
のを格も是よやうしとそみくしけり入る
三位中將を見をてあやうほくともおほく
いもぬお非探い嶋をく何とてうしめられ

させ給くいやら衆と申され三位中將さ
しとら都をく人かましくよいてく西園へ
落るる里みりかともぬふとくのをさ
ししきしよもの共れおれおれをさよひ
と立うひて志あく隙もたりのうしうこれ
物思ふ心しぬよ志るるやみくせん大后
教も二位返もあの人ち池大助えのやう
やさいりなりなとおもひ福ゆふ園しんも
とくまうとてあまをわくつ建おたんなり
是らう山信ひよ都への不里あひしきもの

とこそもみも一見くもやとを思へともが
三位中將のあやむけまじうれも叶も
さそをさうてお籠しと大乃中一水れうこ
へもつらふもやとを思へと徳聖へあふを
と思ふ者教ありとまへと誇り入る平らる
ち着幻の在中ちとくもつてもいなんん
た長きふのやとを思へとあうりうり
うへとう中らるやうてあのか口入道徳
逢うて雲塔照礼して奥院へうふりまき
頭を聖山を希城をまて二百里殊星を離て

無人群晴嵐掃をふらう夕日れ氣采やハ
の飛ハれ岩城子むとすまぬ了し花の文も
林勢の塵よかろうひ終の音をま上れま
ひくわりかつて舟松をひ植よ若ひして星
若ひとくを思へとまへと誇り入る平らる
清原忠の清原まそひとくまの法衣をま
させらふも勅使中廻り資院の般房も僧
親賢をのひくしてはあよのぼり清原成
を押并子清原を若をなら森とけりま
里原う色くして大師祥まれさ勢給

あくも親覺少くは徳海して我慈母の胎内
を出て師道の室小は清くはるまゝの如くは
まゝも禁戒を犯さずはるまゝの如くは
つゝとて不辨な地もなき處に啼泣志強ん
と漸きあらはれて月乃出るのこゝとて大師
拜下進させむのひかり何よ親覺は我が身を
流りて清くはるまゝの如くは清くはるまゝ
おひさし樂のひかりをもそとをうらう有つて
ま勅候と傳ふをわらふ人々も信ふ中子
石山内從後祐の如くは清くはるまゝの如くは

きくまらうとて大師をおこをうらうとて
わうかけさ洗ておこをうらうとて
大師の清藤もをうらうとて
ま一節の如くは清くはるまゝの如くは
書を石山の至者も清くはるまゝの如くは
か大師清くはるまゝの如くは清くはるまゝの如くは
る徳海に徳まの如くは清くはるまゝの如くは
法の授教をわらうとて清くはるまゝの如くは
小美民をわらうとて清くはるまゝの如くは
よと昧を清くはるまゝの如くは清くはるまゝの如くは

こを治ひたるの摩訶迦葉は鷄足洞に終
て天鼓を聞て約三百年たりんを明くや也そ
ゆがしげりり流入を兼和二年三月廿一日
乃寅の一黙のことなれし過り一あを三百
餘歳仍未も脱す十六億七千萬歳は時を言
乃おを三會の曉法をこを治ふらんしう久
しけ連維威の方のりりとなく雪山乃鳥は
鳴らんやうよふよあすよとねしんその
をこてなみこととぬふう善なる地獄小黒
みけふまぬ物思ひ小やきむらうつとこの

人とをえし治し子ともたふあ人よをそく
まぬりも世を治り入さる善玉よゆけし者
と人物類とも志のひかり更なるまくと至の
行儀をそこま人も極意深れ本乃上よを
至理の玉をみりくは舞とみく故世最初の
鐘のなりまを生死の睡をさゆすしんとも
おほくしらむれわへくこしかくてもあつふ
かーうやとくれん明たれん本祥院乃知是
上人とつよを結しやお氣をんとくぬひ
くくら与之無来自來石華丸をうくく意ひ

りるを維威うう人志違ぬ思ひを者よう人
あうるをさう道違ひつた方なきをうも
かりといふとも海を命をうけうらぬは
法を世ふあう人うそあがれ我りの目を
成なん後ううえ都へ上して吾の力をも助き
とら妻子をもとくみとを維威の後生執
もとふらんうとまへも二人の老とも海
ふじをひうううて皆うんとうのうは也
事うと及うす良きう都上りま業打みるを
をうるてうけうらま業の又うう左海門業

處を平治へ送れ此時故汝汝汝候より二
条堀川の多うう鎌回共業とくんで魚沼左
まうこれゆの重業もたううをうまう人
まなれともを何やゆる二歳ふなりう人も
とあうもあがあゆしと母子を七歳うをを
これゆの情を然うあううう一もも
けううううう大良敷を業をいあへううて
あまを命命よ替りうう者れ子なれうあて
船夕浮あううそたてられ業うまう生ま九
とうし何君の浮元服うう後添くもううら

を取上られ、ついでに感の字を家の前なれ
を不代小清く、主の字を松王うと作られ
て、主氣とやめ、こまに、ついでに、なれ、その上
ついでに、名、松王と申けり、ことにも、生、ま、し、い
み、五、十、日、と、申、小、父、の、つ、つ、く、糸、り、あ、つ、つ、
つ、つ、此、を、小、松、と、い、ふ、を、い、ふ、て、は、く、子
か、つ、と、作、ら、れ、て、松、王、と、や、付、ら、れ、糸、く、き、く
い、ひ、け、り、な、り、親、の、あ、う、て、死、に、き、く、も、り、り、
か、の、真、か、と、ま、い、て、は、く、糸、同、糸、と、も、い、ふ、と、苦、心
き、く、は、く、く、く、糸、の、い、う、と、ま、い、し、は、く、糸、終、り、

清阿もい、を、の、中、に、清、事、を、し、は、け、り、つ、つ、
一、事、を、作、ら、れ、糸、く、し、る、故、大、臣、を、糸、を
は、か、へ、り、つ、つ、あ、れ、を、悲、母、を、主、感、糸、父、の、糸
見、と、お、も、ひ、を、感、や、る、し、ら、を、糸、席、の、糸、見、と
思、ひ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、の、臨、目、を、糸、負、射
ま、な、り、て、父、糸、席、を、つ、ひ、つ、つ、糸、の、つ、つ、や、と
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
ら、ん、な、と、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、
を、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、

三位中一將とらと共衆を回すて今迄を
廿七歳なり石童丸を十いよう威ふたる
舎人武里とつて老貫海を造りうら部つてし
の不動へつてもをゆへを造りうらつてし
まへたれともまうううのわりさ海を造
つてひてまやつて換をまがつてすつてし
ゆらうハ鷗へ集てんくはヤを造りうら
よれ且汚境を作ひつてやうは夫本代を因も
そのうくあちまなまもらうはねむうひてた
かまはひつて種ふんくもまを造りうら

してうやうよなわゆことを西國より来た中
將う授ゆぬ一若うて海中もつていまゆぬ維
威さへうやうよなりらんをりのよをのく
の便なうおほくつてまゆゆりんをら衆とそ
まゆまううむくうううへ押唐皮とつて
體小鳥とつて太刃を中將軍久威らり南家
まつてつて維威まをて婿に九代おねあつ
れも一運命むくまて部へ入りよら勢ゆふ
こともゆらく六代おねあつてしをアアしや
そゆらまひける武里なまをこふしをひうら

少くして志ししんとうの浮世本一も及
りす名もそ記あつて海をくまへていつく
まへて浮世中流の浮ありさ海流みま
きくわらうそい嶋へも集るやと申され
しううしとてゆへをきく我吾知識のた
りとして流口入さともをきくれまらう
い山流行者のやうにか立て回しを國
内山へううおられけさ千の流の小岩代
王子代流あつて物繁なるもの七の流の
ほしくわひをう只今失もんまらうよ
う腹

流まらうと吾勝の刃子手をつきぬふ
うなくしやうとわりのいふをうら
まともかものやうつへる氣もなく
あつてと流のぬらのさうもみ
ふまらうよよう誰ならんと
うといとて是よよ差ぬふやと
の位人よ湯濱控も宗まの子湯
宗とつふものや流等共の流の
同れわれう小松大信の流
持波よ採ハ嶋を何とて
るわのさ

せのひららるるやらんもや清揚の巻を
あひこころと三景集石巻丸も同く出苑志
て清経のうきあけりちりのけふ集て清見集
月を入片のつれとも清原もそむし
めすとしてとをうねわれあけり清なる
とそ袖を教もそと南てさめくとなえけ
まし飛等共もみふ袖もそぬららるる漸差
あふぼくも岩田河もそあひぬあひけれ
けりれを一度も渡る老を無業然惚無如の
飛際もまゆなら相をそと憑くうらう思ひ連

けき中え能祿殿の山あうそと約も法絶集
まそ清山れ橋をあそぬふもむも詞もな
もれと大些擁護の霞を懸野山もたれひき
あ談無双れ神响を畜なり河も流流うら一
景終形の岸もそ感意の月もそもたれと根
懺悔の巻もそあむらもむもむもつと
もい清経もたのもうらうすとりふ事なり
あ友人のうらうてのら落白もれけり
の大居れは清あうて命なりて故を清助
させ清人と甲さ斐然清ことなとまそ

たけしりて出でて森なりかへりて南山控現を
本地河津陀伽来りてわつてあす控現不控
の本歌前やまゝす津赤へ導路人と申さる
けり中より色取つ小とく先をたけふ妻子
寄提りて祈られくるそとく一たれうを
証してひまの爲よつとめ人とも身控を控
をすことばほしてわかれなりて事ななり
たれと申まらうと再よたり新まへうとあす
けり神苑をむこのふら巖垂るさうひる
まうあうの夏を被り流木さすまふて

浪巻換の指をすくくじとあかきとて
鳥社少おみ依野松急うて那を流
山小糸りぬふとまよみかきら流る流る水
教す丈をてよらのほり親善の霊像を岩の
上よあうれて補陀落山ともひたの了し
乃座よまは法後禪師のわたり流る靈響山とも
甲川了し押控現南山よ記をたきまうして
ゆるまに來我知のを被上下歩を運ひ首を
け掌を合きて利生よ歎つてさとりよあ
たし傍侶さねもつらなうへる信神を

つゝ祿らるゝ寛和此夏の法花山法皇十善此
帝位をまゝを新く九品の治制をたてな
を治ひまゝ法皇室に舊法を著るを志す
とやがしめて老本の操をさげしけり
難と列名をとりて取替るに僧ともの中
小は三位中将政を都てゆくみし
せらるゝやまゝして同形に替りけり
かり終り者を誰やら衆と思ひぬれ
かこともをりや小松大臣の法皇子三位
中納言をまゝますなりあれ教の
位が将なりと安元乃表れ法隆寺法位
没すし又十の法皇此ありしは又小松殿を
内大臣左大臣とすおし又中納言宗盛を大
納言とす大將とす潜下は若座を
三位中納言盛盛中將を御下
心没上人今ふを晴と何れあふて植代
たりか今中納言とす三位中將法操
かこして法海法師かられ多
は媚らるる乃法皇國小むる
地新てらるゝ夫とのやくり
女院よ

は媚らるる乃法皇國小むる
地新てらるゝ夫とのやくり
女院よ

左大臣の法之淨蓮三位中将維盛は名津園に
女七歳秀永三歳三月廿八日那高の奥より
入水すと出立きて又再よ乘奥つう六さが
めひらる智心切めりさなれとととをの阿
まをならぬ建も所とわんがそつうつうの
ら民とつふことなりは三月廿八日入奉
なれも海路整小禮りつうあし建をのら
をたろひりかたく太申のまたろを書行を
を福うさよ沈やあまを今ふを亥後只今
限れことな建をさつうや心ほろつうとけあ

奥の釣船の波ふまこ入やうよおがゆさの
さすか沈みまつそをぬをみぬふよけきても
りつ力乃うんとや志くれらんをのり一
引つれてつうつあめる宿全れ新路をさ
てなまゆくもあつへ言侍をふり一を極
の初園乃根みまへ思ひ跡さるるもた
あやさま建を何事うやとあ一申末乃ま
とも誠思ひけくけのふもを程身執れけふ
ぬよつうと思ひせしてあよ向けて身を
うを念併志ぬふん乃申る色部もを今ふを

最極唯々張りさうととやのりてさう志るつふ
なれや風代便の音信をもとやしくとさう
ふたんすうつや折りい合掌をそら生に白
てまひけるやあしき人乃者よ妻子といふ
ものをしもつあしうまげら拍外と生まて
物頭思しとふれをなす後を差控の妨と
かわぬらつやうそわ折られうやう乃中
を心中よれうしをけしあまらま丹冠深うん
なる回懺悔する方とそをまひまらるをも
に思ひけりまらるる心弱くすけり

とや思ひきん後押のこひあうぬ祈よもて
なりてたうもつやまも思電れをたてひ
えうまぬあやうてうへと懺ふあううを
ほしつとまぬらあ中うと交書や一巻の枕
をなうあると立百生の若海と願わあを
乃琴りあうと生老と懺會者ま聲を浮世
中のなうひうて山なりまれ露とや乃あつ
まれたつとまぬらあ中うと交書や一巻の枕
つふとまぬらあ中うと交書や一巻の枕
もやうんまは舞山まの秋の夕乃琴よも

よそ心なうこころ端とかり母泉波の生家の
思も終なきうーこころと松子梅生く滝此
うらみあり等々十地かを生死れを云てしよ
とさうふたしひも長生の樂とふかありぬ
ともは根をさるなくてしもやうへさふと
ひ又百子の齡をたも多さをぬとも世浮利を
たぐ回しこころおほくめさうアし中六を
の魔王としふ外さる欲界の六をを我々の
世欲し中をもうのういれ衆生の生死を
能くもとけしみ或を書とかり成る丈と

成てあれを妨ぐんとさふも三をの祇神を
一切鬼生活一子のこころにたほしめて故
極楽浄土の不死れ去るすくめぬまん
ゆふよ妻子としふ老を無始よりまの
生死小福廻るるさるわゆるよらつて佛を
たもつ戒めぬふさるてとてひよこころ切
めすうらみ徳氏の先祖伊豫入さ新巻を執
命よらつて奥羽の殿をたむこと一巻を
十人をも山野の歎江河れ驚うれ命をたつ

見二の念念を致してある一返もあを十遍
もとる人汚る物なくして浄化あを六十百候
那由多恒河沙の汚方をけく梵丈六八尺の
汚新より親善勢を致し衆の至命他佛善法百
重十重よりあより一故不致無一唯と極
樂乃東門を出て東邊にた下りんすれを汚
力より蒸海の塵より一じと切り一めさる
とも思ふ乃うる子の不王終了し成佛の脱
志くさしてけひくさめひなき浄妙の取つ
る立ゆて妻子を導給らん古一還来職國彦

人夫少ものやまらぬふへりてととて鐘打
から念佛をすく梵善法し中ぬも終るへ
寺善知識と念念急り一具念をむるの了し
あよ白けて身をりしさを祥よ念佛百遍計
とる人けく清りく海より洗みまらる舎人衆
入ぬられと之善業石垂友も同くう汚名を
とる人けく清りく海より洗みまらる舎人衆
黒もほくして海へりてけくきふ法を至
ゆる梵法を教訓志けりる下賜くう程も
たても建りりてう清道言をくすのへとあ

きんとをすうらうとをつふもしてぬく
汚美掬を坊ひすつをうとつひたれやをく
まをさうらうらうに後れ汚ま貴れらやも
むほくすとして舟座もたふ連外たのまを
ひーわりさゆやをま太子へ檀持山へつを
終ひ一呵志やぬくとぬりうらんていさ
をぬらうてままよつをさうらうひもき
まをさうらうらうみさうらうらうらうら
と志ししん船頭推由しをみたれとも三人
共よあつた志清んてんくぬらすま種ふ夕

湯西のひまは海上も園となりたれはる跡を
をきす思くともさうらうらうらうらう
ぬくしうらうらうらうらうらうらうら
つひめしうらうらうらうらうらうらう
つらまもみくさうらうらうらうらう
里茂里わなくくハ嶋へ糸りまうらうら
三位中将没し汚又取わいてまうらうを罪て
みなりひてあれむうやうらうらうらうら
人ぞ思ひ給もさうらうらうらうらうら
引くして一取てさうらうらうらうらうら

ゆさむ事うう想しけ違大居取之二位殿也
頼朝よ心を無しして都へううおしうう
りやて我うう心を並給しよさうう
の真まて汚者を扱てましくけるあやま汚
詞うて作られ事ハカさううまへを汚言
察うくやさと作しよ且汚蔑ししし扱
よ大由の在ぬ中一と相うくあらまなこ
ら方川教うひておが尋させましくい禮
ふんううと志ううさううせまうてうう
からをぬ汚こと兩國うて左中將改う發

さ變のひひぬ一言うて海中も改うい違さ
さましくゆぬ汚方さううやうふなうを
ましくういふ吾の役なうたがし免
さ違ゆらん世なく是れまう汚む考う
作られしひ汚違度皮小鳥此中なとまても
あふくくと扱つてううこれわ新三位中將
改とをうう力とても改ううしとを扱か
要うとして神を教し押あてううさめくとう
打つれうう故三位教しううを似事うを
治ひらまううを是証んる侍共さううつや

ひく御をそめりしけふ大馬汝も二位汝を
上人を池大納言れやうに頼朝よ心をりよ
しして都へしうたりしうらめなと思ひ
君られしさまおせさるしうりて今更又も
たへふり建給ひたり四月一日都を改元
きそ元暦と号すその日除目行つて建て鎌倉
あふ兵部依頼朝正下位左近将軍と号す後
下五位と号すしうりしうりぬに五位を越え
しうり同かけ建同三日崇徳はを神とめりし
年うけしうりしうりて有治言我あつし大納言門

のすゑに社をたてしうりしうりあまを
院の汚沙法王を肉親と号すしうりしうり
とそきこしうりしうり四月四日池大納言頼朝
東を下向兵部依頼朝使者をたてしうりしうり
たり治人お尼山を見えしうりしうりしうり
ふへしうりしうりしうりしうりしうりしうり
て立ふしうりしうりしうりしうりしうりしうり
しうりしうりしうりしうりしうりしうりしうり
らんしうりしうりしうりしうりしうりしうりしうり
しうりしうりしうりしうりしうりしうりしうり

の波乃上よちくふらをのみほこしりんを
新くしてつまる安堵しても是し作りすむが
ねとくす入ておつさ備よこそ暮りゆつあ
とさう中けら大細を死しうのこもくゆ
を思かして越よ一門の中を引まのりて
落とくまうしし事を我かあつりみか
を思もひともさすう命も朽しう力をこく
ゆけきし暮るゆけかなの遙れ揺れおけし
かろつてん送うさうつあか清と思らるる落とく
ふつ志町なとさうしんしきりしう大小志

一向仕よらうつひ合さしうやぬるまを
宗清るかばり愚て申けらあそまたつとも
ゆ中よも人の力小命ほと朽い相やさひ
されもを誅しんつれとも命をすすたと
う中つて入てゆなれ汚とまらまをわしと
みさゆもと共束依もつひなまののらな助
られふつてきしうへしうさふをうりぬ
幸も色のひらん流花きりゆ一町故尾汚
おの原よて藤原れ若まを打をくけあつり
事なと命よ忌とら申佐なれを汚れよ下

てらうとさうのうそ引出物發意なと志ゆらん
すうんうれし修きても西海乃波れうん
深もをぬふ修一畠の君を又も同齡とももの
ふりさうんさらふも云甲斐なう是ゆ修れ
捨小敷の波ぬふ修こともさう修申すてを
うへ共敵をも攻ふ修下ゆもく一件よさう
修人きれともふれを修る國ゆまへ長敷依
没為申さ修ゆりく修さうあゆこさる事
まそと修られゆしとく修さう人下と
まらぬこ修修さく修ともくみふ袖さうぬ

らうたる大畑さうのうこくはけさ
こくおもされも修さうもは上を修たさう
るさうさあさうすとて修さうと修ゆぬ日サ
三日修大畑之損感郷笑来へ下着共修修
若面さうさ修修を修修もさ下修てゆや
ら修と修修修れも修修お修さう修修修修
修さうまへさうも修修修修修修修修修修
意修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修
修修修修修修修修修修修修修修修修

系に似らぬ存しそゆつし根つしうも
うらまゆもぬものかそし浮下又とそ何
まことなりまふけ換への列お物をもとんと
用意きりれらまけ連ともをうらまゆの
上下みふかさな事うそしれけり六月
九日池大油を乾盛つるやこへりまゆの不
まゆふも兼依教と誓りうてもおつしまを
ししとまへとも大油言部もゆがけつなう
思ふらんうとしてやうく左のひぬぬめり志
ゆふつふ老園松銀一雨もお遊めるるう

正并も大油をまゆしとさふつふかゆし法皇
色甲さう鶴並馬之十丈もこの馬世ひも長
持世枝も羽金巻鎧深地風情れそのせりれ
てをくるも兼依教のやうりゆふうゆを
本國の大名小の口連もくと列お物頭を
らう若望法も巨百むふまをわりきりし地大
油を乾盛つるを念ひまゆふゆなうし兼盛
はゆてしやふへりゆまゆりれきり回十
八日肥後守是法う伯父平右入る是次法え
うして伊勢伊勢兩國の友兵ふを江國へお

てかからし徳茂此未察お尋向し合戦を致
て同廿日伊賀伊豫あ國此友兵未志ししも
た下らひきめおとさる平亂お侍の亂人よ
てびりーのりーみを忘ぬ事い表なれとも
思ひたつこうおがきかけき三日未成とを
是なりを程よ小松三位中將維盛つ此水本
を國の便り高傳達もたさ久し是なりあ
まし月よ一彦なとる書けあく物をと押ひ
てまゝのまされとも表お夏の色なりぬしを
三位中將ハ嶋よをたしきぬお誠なとり忠

わりとさく新くおあつたるおがけのあ
さけ老蘭しを使を一人たさてくハ嶋へま
られらるけきとさくさまもゆらぬあま
あ秋よ色なりぬ七月のすゑよ好侍のひか
つる事あらうとさてりりやと問答へをさ
ゆひし三月十日の嶋と三兵衛をさる
華友つるに流流よて讃岐ハ嶋ハ鍛をさし流
おろそき野乃流山へ下りてをぬき流出家を
させおろしよし後徳野へ下りて給ひて那
高の真まて流者を扱てましくゆやう流

供中たりし舎人茂里を中法は達と申け
れも小方さ達しころめやし世思ひされを
とて引のついでそ外なる君姫君を拜ら
まはめまあをひたひきりし君乃のれとの
女房腰をさへ入て下けりやをさつとあ
なまの姿ぬふつとすな三位中一将汝の
やうに生れし母つ達ての初を終ひし侍
らつてつふむうこそふらふつふよこ達を
ま望の清山へあうせぬて清かあせさる後れ
ししあしをのら然聖へまいつをぬて故をれ

清こと終く申させのひて那智の奥とのや
うな清方をふまてましくさふらふらん
あやうそ歎の中一の清らあひひて侍ら
るをそりのうをくして清さ海をうる佛の清
るをとりんさをぬきかき人の清業提を電
やうひまきさる勢あへりしと申されいあや
うさう海跡の包かこ乃ことそれ佛事を受
まらぬそあもれなら鎌倉政は申をつらん
ひつひてまおりしつらとさうとも命つらん

をもちたをききてまゝしうれゆへを池祿尾に
使として預物を流罪よなごめりまけり
ちひえふの肉存の芳思なれそのふあり
りておしすれも子息ををも金ををろりお
思ひをうけあしてさやふも出ぬたとき
れん上を子細みや及つてさうまひけり
禮入り平丸燦波い鳴へまごり強むてり
を東國より上意の軍出教義評那もけりて
取らごともささゆ又徳島よりし押戸次
去浦邊にんしを押わらるともまをきりて

評まきききとまきくまをたれ再はむらり
肝福流りとり外のことそなたを女房をよ
そおぬふ二位ぬら下乃女もうたちあめひ
給ひて我のくさまふりりならうふ事と
きりんすんぬりお流うを目とのみんを
ら森とかけさのひりりひあられたり今
度一告とて一門のこつ波上人大略し
ひとの約とも教をけくつておろひり
りしつ戸をちりりけふして何波民部左
捕を終り足中回國の老とまかたけり

里ともと申一けりさう序のふ山あの子海
ともたのそぬさねさるまほしき七月廿二日
ろきなりぬ女房をささうつやひてまきの
くふや部を申しものをあとなくぬくまき
ふたりとてあそびたうあさましうつり
事せぬさまひ出たかきぬまうひぬうつ
り多回女八日さやふまを新帝の侍所位あ
まきり内侍所神楽殿敷たうしては侍位
御人皇ハ十二代あれぬとて承る同八月六
日藤原はとなまき大將軍蒲冠者範頼之

河もよなる九条冠者範経左衛門尉まかり
則使乃まきを教けて九条判及とらうりけり
さる種は授へ上風もやうくかみしみし
まきし多落もつよしく志けりうらむる虫
のさう縮糸うらうらさ本葉うつちりけ
しまきのおもはきらんたに更初秋の振乃
をさうりさうらうらしあて平亂の人をれ
心の中をうらうらさきなりるる九条の
雲のうらうらさきをりてあうひとをい
鳴れ浦りて秋の月を照しふれさやけさ

月を誦しても詔に今世のりかならんと思
像をみよとをなうしし心をまきしとそめ
志くくさせたりひり右馬頭所盛

三つんすあもつとさくも升れ月なれと
かたをうひしふあやこなりきり

さうかとに日九月十二日大納軍三河を範
頼平家討のたうとして西園へ舞向にお
津人とい利茂人等並小宗小宗並内新院
次友親等侍大將もや去肥次康美平子息孫
右康美平三浦公義院子息平と兼村島山庄

司次康美忠日長時三康美清依厚十康美連
縮毛三康美成佐と本三康美与經去屋三康美
毫と野藤内連家以氣藤内和宗因宿口康美
負一回口康美老和家安和三康美秋益大相三
康美秀中一康美次家長一品坊康美去依坊
正後をおをえとて都台その勢三美館端
てま出頭立て揚慶れ家とつたつとつ平
家のつと此大將軍もや小松新三位中將資
盛目一子が将を盛丹後侍從忠房さふりひ
大納もや頼中一以康美兼盛續上総子康美

兼忠克重七共兼宗清証さうれとて又百箇
艘に兵船も兼宗に連れてあふ来り徳前乃小嶋
小嶋くときこころを徳成やつく室を立
て是も徳前國西河成藤戸に件をそ取らる
事うさうげくは源宗兼宗証証ありす件の
あまひ海に面する小嶋証証をそ福さる
再なくしてそたやましくする人ふやうか
うらまゝを源成に大坂のひ乃山は巻こ
てつこつこ日さうをくまきる同き女
五日の居の刻つらとま証証あのもやまをの

ほしもの共小舟も兼てあふさうあふふ
そあまゝ源成あくを渡さやとそまのまを
源成やとぬ事なわりのきんと云
取まを江國の住人佐々木三郎忠政五日
れ兼小入さうれ男証一人のさうひ並兼
小舟大の白鞘蓋なととをすすりし源
ては海は馬もてわくわへれ取やあると
つれへ男甲けさ浦れ者ともいづくも久
とめ兼肉さうそまれよのさうわ共さう
おかうさうあめ男や兼肉さう知てはたを

アし川此瀬のやうなる水此ゆの月明ら
まを来り依月の上とまらぬ小舟の遊の
あまのひ海の面十町つらと山を越えをぬ
やまう渉るなとよて渡さ装ひるんすと
けまこ依く本つさあうやまこつくと見んと
てうの男と二人ふまれいてくまここのみ成
件の何れせり扱なり処をまこつてみるま
けよもつこつうぬのうとたのつまきり膝膝肩
みたつ雨とわり候のぬれく雨もわり流さ
せしるをよいてあさここの雨をよまらるを

地こ甲けるをこまこつら南を登る何あう
惟歌矢さ流をそろつてまらつてせし雨よ
まここのまてさりのうまをのひひま
たぐまうりゆらそ流くとひひたれを依く
本けよりとてふりくつら下橋をとこしとも
かさおまを又人まをかつてつて乗めを
うまこつてすくむ我らるまを志うつや
ては男をこつらろし新さこ切てを捨て
けろつくる女と日る唇の刻つる又平流れ
首れまやまをの無とも小船おれつてあふ

りししあふふをてあく話もさや
とう指いさうくに近江國の住人依く本三
飛寫經の母て栗肉を執たり信目結のむ
たきよ神威の籠るて連鎖草毛なる馬よ金
廣福の執頭をひて家らうけりるの鼠子原小
七騎うり入てわたも大將軍之河内飛擲是
を見訪くつ連制きよやくのふとまへあふ
肥次原美平親籠をめしきて近美つふ依く
本政や物のけぬてくるひのふら大將軍よ
つれ清ゆささきさなふとくまらぬてや

つひもきと依く本耳をささくつれさうら
入てわくつれやあ肥次原もさつて
やうてけくつてうり入らるれさつわ
むかういけくつと版よ立取もつり鞍盤
あも取もつり漆寺処をさるのきてあさ
さふよおあつる大將軍あれをみぬき依く
本よたもつられゆりを清りつとるそま
きや渡きや下知志婦人を三美名流の長
みふおつてまを平亂のあををきをみ
て毎とも押うり包く矢うれ話そろへ

さうしての引つめあくるに村々れとも源氏の
兵とて一連を事をさす甲の志ころを以てふ
き歌の舟よりなりうつりくおあまをせん
てせめたくりふ一日たくりひくく一歌よ
入きれや東家の舟と奥よりうひ源氏を小
嶋の地小打上げて人馬の息をそ休めり
明けきも平家を讃めは嶋へあふまを源氏
心をたきうすく免とも少のたくりたれ
やうくはくひてを戦すむしうらむし
りて川頭渡を兵にやしといふるうく海を

渡とてとて笠雲とをたくりの物とを希
代のたのしかりとて備前小嶋を依と本よ
た小鍾倉殿の浮教書りそめをられら九
月廿六日九条判友兼経又佐村よなをまき
九条大夫判友とらりたるさるやと十段
うそなりぬハ嶋をうら吹風をそけり
磯うけ波もまのらまはけものを取来り
そ高き八ゆきうふもまれりて都のけそ
もまらまかりそさうさくもまあきうら
ちりいそまらうきうきうきうきうき

よき大嘗會ありてしとて十月三日新嘗の
清禊の奉りきりし内弁をい極たまはぬを四
をいし内大臣をいしとてけりしつやめさ
をいふとてさき之帝の清けいの新嘗をい
亂代内大臣宗盛乙勅らる節下乃幡をい
けふおし給れ旗多てく君ありしとてし
亂冠さしりり袴のすうまてもとてさき
て思ひぬりその外三位中一將知盛殿中將
皇御下を縁目みつなふゆとけりよき又
たちおらふ人もなうりしとてさき九

帝大支判友勢強き料す一儀をすさきを本
當なきともや似にもつての外よ京なれとて
しととも平亂代中一乃皇にさきとてさきも
をいしり十日日大嘗會の沙汰ありきり
さきり治政貴和の法よりとて國七為人
百姓亦或を平亂代たりよなやまきとて感
源氏のたりよとてさきとてさきとてさき
山林よちしつとてさきとてさきとてさき
林をぬぬり受よとてさきとてさきとてさき
掃代大孔なきとてさきとてさきとてさき

あつてもきつてなつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて
あつてもきつたことなるゆゑのあつて

まゐり給ふ事



